
チャンス

サラダ味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャンス

【Zコード】

N6430M

【作者名】

サラダ味

【あらすじ】

周囲の絶叫を最後にオレの意識は途絶えた。

周囲の絶叫を最後にオレの意識は途絶えた。

「2番がよオ見えるなア」

横に立つ初老の男は、櫛ひとつ入れていらない乱れた頭を赤ペンでかきむしっていた。

オレはそれを不思議な思いで眺めた。手に持った競馬新聞に視線を落とす。

2番の馬名とその他の出走馬を見てオレは混乱した。

オレは間違いないこのレースを経験している。

オレの記憶が確かならば、このレースは2 10 3の順に入る。

3連単の払い戻しは8万円を超える万馬券だったはずだ。

オレは外れたが、隣の男が特券（1000円）を持っていて、ゴール前狂わんばかりに絶叫していたのを覚えている。

しかし。

そんなことはあり得ない。

だとすれば夢か。

混乱するオレをよそに時間は過ぎてゆく。締め切り五分前を告げるアナウンスが場内に響く。

オレは現実味を帯びた夢だつただけに、それに賭けてみようという気になった。普段200円づつの5点買っていたところを2 10 3の一点買いで勝負することにした。

ゲートが開き、十頭の馬が一斉にスタートする。

各馬ゴール付近にいるオレの前を砂煙をあげて通り過ぎ、第1コーナーへ突入してゆく。

2 3 10の順に第1コーナーを周る。

やはり見覚えのある展開だ。

レースは坦々と進み、最後の直線に向かうまで上位三頭の順位は

変わらない。四頭目以降は差をつけられている。

もう、これは夢ではない。やはりオレはこのレースを見ている。呆然としているオレの前を三頭の馬が駆け抜けた。

歓声と悲鳴。

「ちくしょうめ！ やつぱり2番だつたか！」

初老の男が顔を紅潮させて悔しがっていた。どうやら予想を変更したようだ。

だとしたら 。

やはりオレの記憶は夢だったのだろうか？

しばらくしてレース結果が場内に流れた。オレは呆然としていて気づかなかつたが、最後の直線で10番と3番が入れ替わっていたようだ。

払い戻しに場内がどよめいた。三連単2 10 3で84500円の高配当。

オレは思わず大金を手にすることに気づいて、我が身に起きた不可思議な現象などもはやどうでもよくなっていた。

財布に収まりきらないほどの金を得たオレは、意気揚々と競馬場を後にした。笑いをこらえながら家路を急いだ。

地下鉄のホームで電車を待ちながら家路を急いだ。財布に入りきらなかつたポケットの札束の感触を何度も確かめた。

ホームに列車が入つてくるアナウンスが流れた。乗車位置に足を進めようとしてはツとした。隣の乗車位置に立つていて白いブラウスの女性を見た瞬間、記憶が呼び起こされた。

ホームから落下する彼女。

それに気づいたオレは、一瞬の躊躇もなく彼女の救出に向かつた。オレは彼女を抱き上げ、反対側のホームに走り抜けるか、救助を手伝う連中に彼女を預けるか迷つた。

結局預けるほうを選択した。

そして、彼女のカラダが引き上げられたのを確認し、ホームに上

がろうとして周囲の絶叫が耳に響いたといひでオレの記憶は途切れ
た。

まさか 。

しかし、競馬場での一件がある。もし、今の記憶がこれから起きることならば大変なことになる。そう思つたオレは彼女が倒れる前になんとかしよう、と行動を起こうとしたが一歩遅かつた。彼女は糸の切れた操り人形のように前方に崩れ、ホームから落下した。オレは瞬時に反対側のホームに駆け抜けてやる、と飛び出しが、すぐに思いとどまつた。

オレでなくとも 。

誰かがホーム下に飛び下りるのを冷静に見ていた。

かかしのように立つてゐるオレを押しのけて次々と救助に駆けつける人・人・人。

誰かのカラダが肘に当たり、札束を握り締めていた手をポケットから札束ごと引き出された。

札束は手を放れバラバラになつて宙を舞う。

「バカヤロー！」

オレ掴み取るうと足を踏み出す。しかし、支えるべき地面はそこにはなくホームから落下した。

腰を強く打つた。だが、弱音を吐く暇はない。逃げなければならぬ。

オレは列車が進入してくる方向に目を向けた。落下した女を抱えた男が反対側のホームに向かつて走り出す姿が見えた。

その先の暗闇の奥からヘッドライトを光らせた列車が、ブレーキ音を激しく鳴らしながらオレに迫ってきた。

そして 。

周囲の絶叫を最後にオレの意識は途絶えた 。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6430m/>

チャンス

2010年10月21日20時46分発行